

# 福田貝塚（岡山県倉敷市）における発掘調査とその記録

—岡山理科大学博物館学芸員課程所蔵コレクションについて（4）—

小林博昭・徳澤啓一・酒井雅代\*

岡山理科大学総合情報学部社会情報学科

\*鳥取県教育委員会事務局妻木晩田遺跡事務所  
(2008年9月11日受付、2008年11月7日受理)

## 1. 今回の紹介資料について

本遺跡では、1950年及び1951年の2回にわたって、発掘調査が実施され、縄文時代後期前葉の貝塚であったことが明らかにされている（鎌木 1986 ほか）。

このうち、第一次調査における第1地点IV区の出土遺物、すなわち、「山内資料」については、すでに、その内容が明らかにされている（泉 1989）。また、第1地点IV区を除いて、第一次調査及び第二次調査の発掘調査の内容及び出土遺物の一部については、『岡山県史』に所収してある（鎌木 1986）。しかしながら、発掘調査におけるトレンチの層序及び出土状態については、詳細が未公表であったことから、肝心の貝塚の形成過程、そして、範囲等が明らかにされていなかった。

ところが、2006年10月11日、本学博物館学芸員課程に対して、鎌木英子様から福田貝塚の発掘調査に関する図面、写真等を寄贈いただいた。写真1のとおり、平面図、断面図、出土分布微細図、現場写真、調査日誌、参加者名簿（写真2）、金銭出納帳（写真3）、拓影断面図等が2冊のファイルに綴じ込まれていた。

これによって、発掘調査の詳細な内容を掌握できると期待したものの、すべての記録が網羅された訳ではなかった。また、現存する記録についても、経年変化等によって、著しく腐朽していた。とくに、記載が完備されていない図面、題箋が記入された台紙から剥落した写真等、断片化した記録も少なからず見られた。

本稿では、これらの資料にもとづいて、1950年及び1951年の発掘調査の経緯、成果等の再構成を目指す。すでに公表されているトレンチ配置図等については、まず、裏付け作業を行いながら、丹念に補足事項を洗い出したい。本遺跡の層位的構成を明らかにし、新たに追記することで、図面等を整備する。次に、各トレンチの断面図を対照しながら、貝塚の範囲を復原する。そして、これまでの鎌木義昌の記述にあわせて、土層注記を整理し、層位間関係を明らかにする。

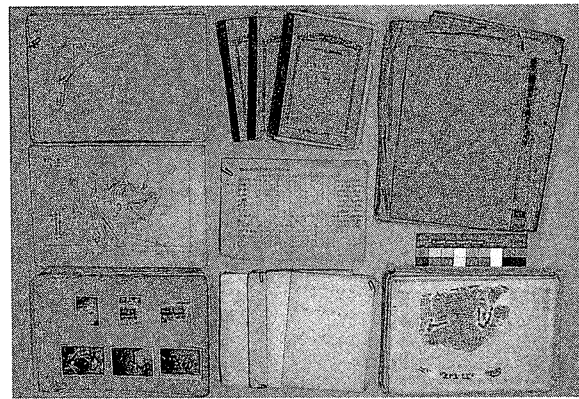


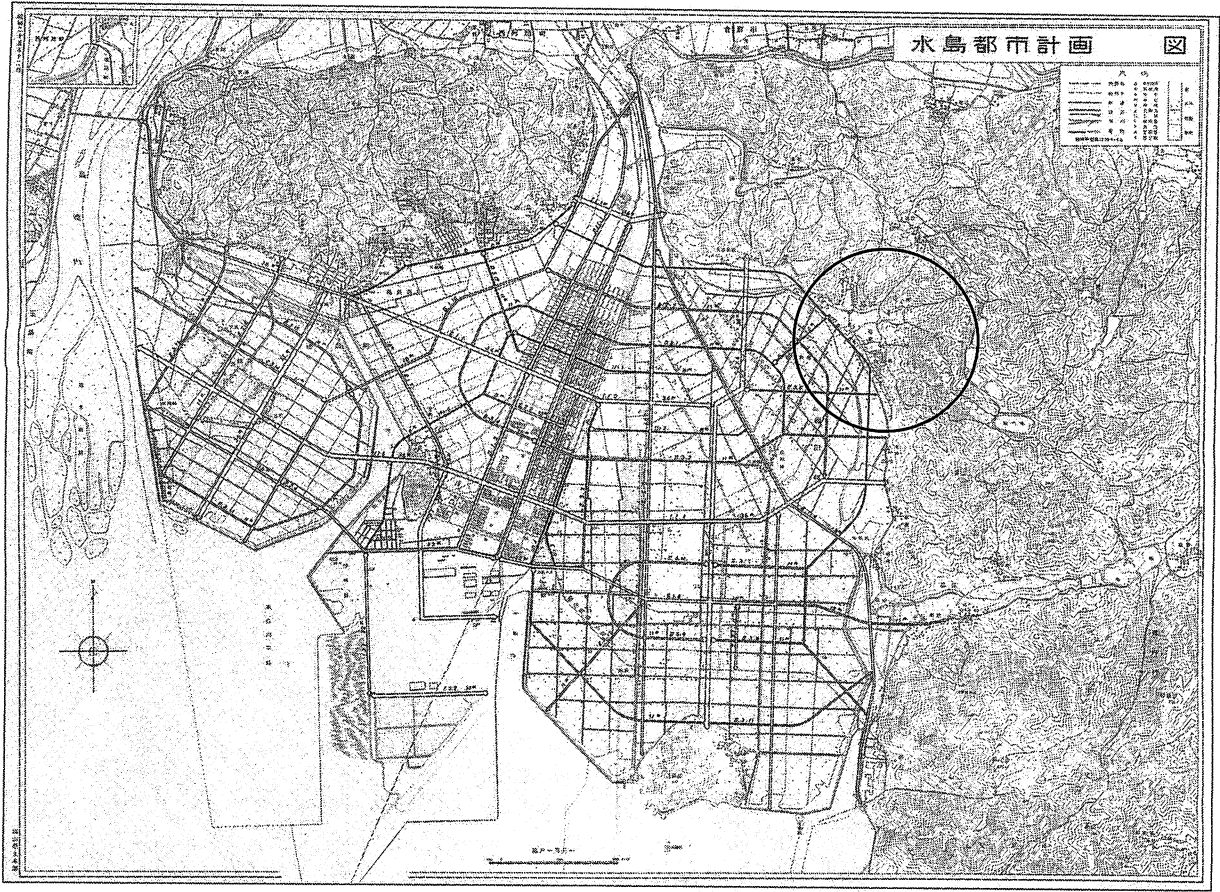
写真1 寄贈された発掘調査の記録

氏名	2月	3月	4月	5月	6月	7月	8月	9月	10月	11月	12月	備考
水野幹夫	◎	◎	◎	◎	◎	◎	◎	◎	◎	◎	◎	①日田市立博物館 大津陽太郎 永田中司 佐田啓一 吉田謙二 坂本信一郎 新井 三宅幸太郎 阿部啓一 松岡 行敏 石林 小林(昭七) 小塚 藤井(昭賢) 藤田(昭明) 竹内(昭新) 原(昭文) 及川(昭六) 中野 近藤
加藤	◎	◎	◎	◎	◎	◎	◎	◎	◎	◎	◎	
伊藤	◎	◎	◎	◎	◎	◎	◎	◎	◎	◎	◎	
小西	◎	◎	◎	◎	◎	◎	◎	◎	◎	◎	◎	
大隈	◎	◎	◎	◎	◎	◎	◎	◎	◎	◎	◎	
岸本	◎	◎	◎	◎	◎	◎	◎	◎	◎	◎	◎	
山本	◎	◎	◎	◎	◎	◎	◎	◎	◎	◎	◎	
加藤直子					◎	◎	◎	◎	◎	◎	◎	
黒田光						◎	◎	◎	◎	◎	◎	
本田英七	◎	◎	◎	◎	◎	◎	◎	◎	◎	◎	◎	
地橋順藤樹	◎	◎	◎	◎	◎	◎	◎	◎	◎	◎	◎	
吉原 稔	◎	◎	◎	◎	◎	◎	◎	◎	◎	◎	◎	
里田	◎	◎	◎	◎	◎	◎	◎	◎	◎	◎	◎	
川越	◎	◎	◎	◎	◎	◎	◎	◎	◎	◎	◎	

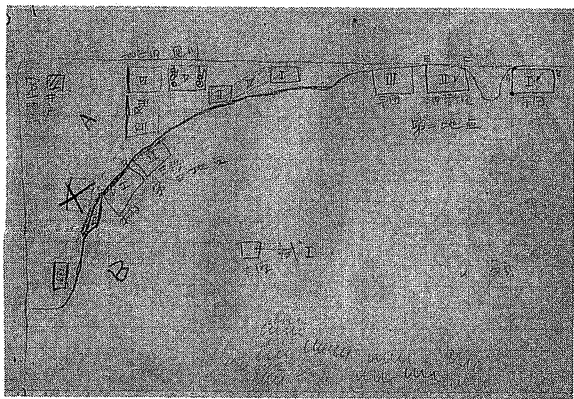
写真2 参加者名簿（一部）

日付	摘要	金額	残高
1-1 (1950)	190-		
1-2 (1950)	1050-	1950-	
1-3 (1950)	220-	2170-	
1-4 (1950)	2200-		
1-5 (1950)	650-	2650-	
1-6 (1950)	15-	2665-	
1-7 (1950)	1800-	3465-	
1-8 (1950)	1020-	3865-	
1-9 (1950)	4230-	4195-	
1-10 (1950)	65-	4260-	
1-11 (1950)	4288-		
1-12 (1950)	4288-	4288-	
1-13 (1950)	4488-		
1-14 (1950)	4568-		

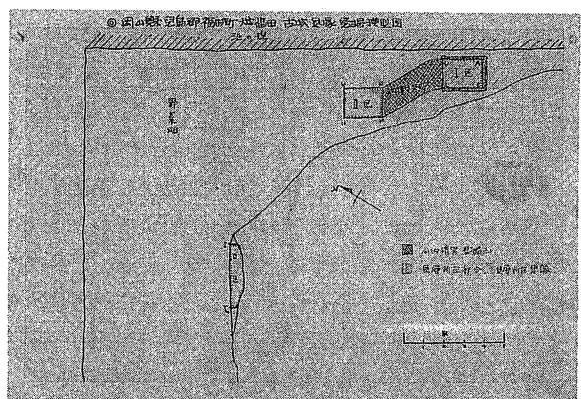
写真3 発掘調査における金銭出納帳（一部）



第1図 福田貝塚の位置 (岡山県土木部 1/10,000 水島都市計画図 (昭和 25 年 12 月) 抜粋一部改変) [1/60,000]



第2図 発掘調査におけるトレンチの配置 [縮尺不同]



第3図 貝層の平面分布 [縮尺不同]

## 2. 当時の発掘調査の記録について

### 2-1. 発掘調査の経緯に関する資料

当時の発掘調査の様子を窺い知ることができる資料として、参加者名簿、金銭出納帳、調査日誌が含まれていた。写真2のとおり、「福田貝塚発掘参加者名簿」を見ると、第1次調査は、1950年8月21日から9月3日の14日間にわたって、延べ311人が発掘調査に従事したようである。また、写真3のとおり、金銭出納帳が遺されており、「福田貝塚発掘費」と「町役場支払関係分」の2つに分けて、会計処理されていたようである。主として、生鮮食品や発掘調査用品が用途であり、特定の鼠屋の商店から購入していた。購入品目を見ると、清涼飲料水や冷菓の費目が目立つとおり、第1次調査は、残暑厳しい折の発掘調査であったことが窺える。また、一部であるものの、調査日誌が遺されており、日々の出来事が生々しく綴られていた。参加者のうち、各トレンチの担当者の調査所見等が書き遺されており、今後、発掘調査の詳細を再構成する有力な手掛かりとなるであろう。

### 2-2. 発掘調査の周辺に関する資料

本資料には、岡山県土木部が発行した「水島都市計画図」が含まれており、昭和25年12月の本遺跡周辺の土地利用の様子が描かれていた（第1図）。すでに、江戸時代以降、鷺羽山山塊の西麓、すなわち、福田町から玉島の間の一帯が新田開発されており、当然のことながら、本遺跡周辺もすでに陸化している。しかしながら、玉島山以南、すなわち、玉島-高島間にわたる水島工業地帯は、未だ造成されていない。また、現在の水島臨海鉄道は、備南鉄道と記載されており、予定軌道は、現在の軌道と大きく異なっている。勿論、本遺跡の脇の古城池トンネルも開削されていない。第1図のとおり、本遺跡では、水島灘に臨む種松山南麓に寄り付くように、貝塚が形成されたことが分かる。

## 3. 発掘調査の内容に関する資料

### 3-1. トレンチ配置図

発掘調査のトレンチ配置については、すでに、『岡山県史』において、「福田古城貝塚周辺の地形」として初出し（鎌木1986）、その後、当時の関係者からの聞き取りによって、「福田貝塚発掘調査区の配置」として、加筆が重ねられた（泉1989）。ここでは、本資料をもとに、「福田貝塚発掘調査区の配置」に対して、できる限りの追記を盛り込むことで、第4図として、更新を行うこととする。

第2図は、トレンチ配置の全体図である。作図者及び作図日不明、縮尺不同である。簡易測量と考えられるが、比較的精度の高い略図である。また、トレンチ配置とともに、発掘調査の担当者が明記されていた。そして、「図写真」とあるとおり、写真撮影済のトレンチに印が記されていた。写真4～34のとおり、印のとおり、写真が遺されていた。

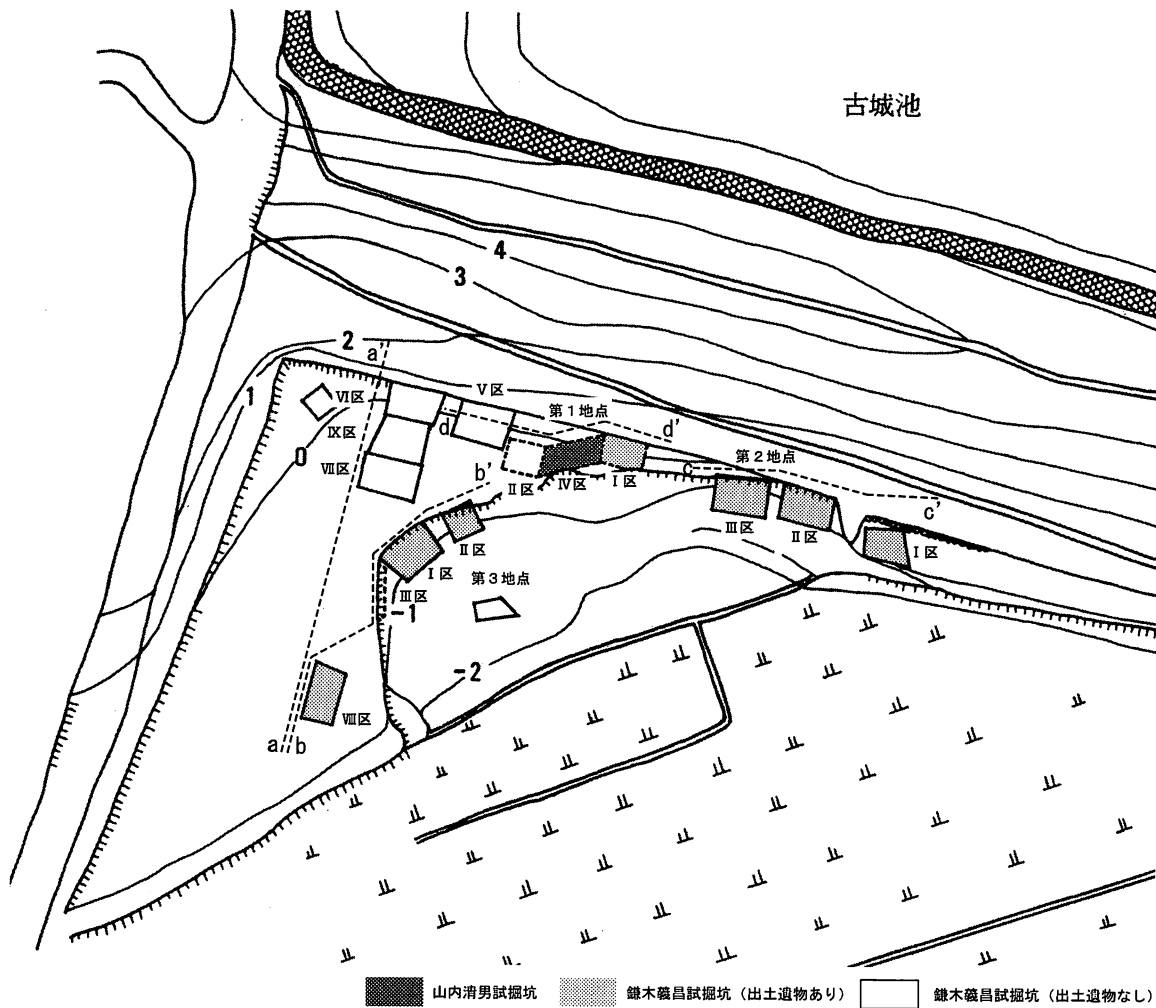
第2図を見ると、まず、第3地点において、Ⅲ区のトレンチが設定されていたことが判明した。Ⅲ区は、『岡山県史』図38において、点線で表記された範囲にあたる。縄文土器等の出土分布は不明である。次に、第1地点北側の正方形で区切られた範囲が井戸であったことも判明した。

また、第3図を見ると、この井戸のあたりに、野菜畑が広がっていたことが記されている。そして、第3地点西側の台形で区切られた範囲が試掘坑「試Ⅰ」であったことも判明した。

### 3-2. 貝層の平面分布図

福田貝塚の「鎌木資料」の動物遺体を同定・鑑定した金子浩昌によれば、ハイガイを主体とする貝塚と評価されており（金子1967）、「それによると主要な魚種はサメ類、トチザメ、エイ類、ハモ、ボラ、クロダイ、マダイ、スズキ、フグ類、コチなど、という」（松井1989）とおり、第1地点Ⅴ区のトレンチから出土したというメモ書きの遺されていた。ただし、貝層と魚類の動物遺体の層位的な関係は、今のところ不明である。「山内資料」と異なって、「鎌木資料」中には、貝類をはじめとする動物遺体が遺されていない。これまでのところ、動物遺体の所在は、不明といわざるをえない。

また、鎌木義昌、金子浩昌ともに、貝塚としながらも、その具体的内容を明かにしてこなかった。しかしながら、第3図の「岡山県児島郡福田町大字福田古城貝塚発掘模型図」によれば、第1地点Ⅳ区及びⅠ区において、貝層が確認され、第1地点第Ⅳ区以南の一带において、貝塚の広がりがあることを推測していたようである。事実、第5図のc-c'の土層断面図を見ると、第2地点Ⅲ区からⅡ区にかけても、貝層ないしは混土貝層が伸長していたようであり、第1地点Ⅳ区から第2地点にかけての比較的広範な範囲であったようである。また、「貝層の一部は東方の堤防下にもぐり込んで残存しているようである。」（鎌木1969）とあるとおり、第1地点Ⅳ区及びⅠ区以東の古城池にむかって、貝層が延伸すると想定されていた。さらに、第5図のb-b'の土層断面図のとおり、第3地点Ⅱ区でも貝層が確認



第4図 福田貝塚のトレンチ配置図 (1/400) (鎌木 1986・泉 1989 抜粋一部改変)

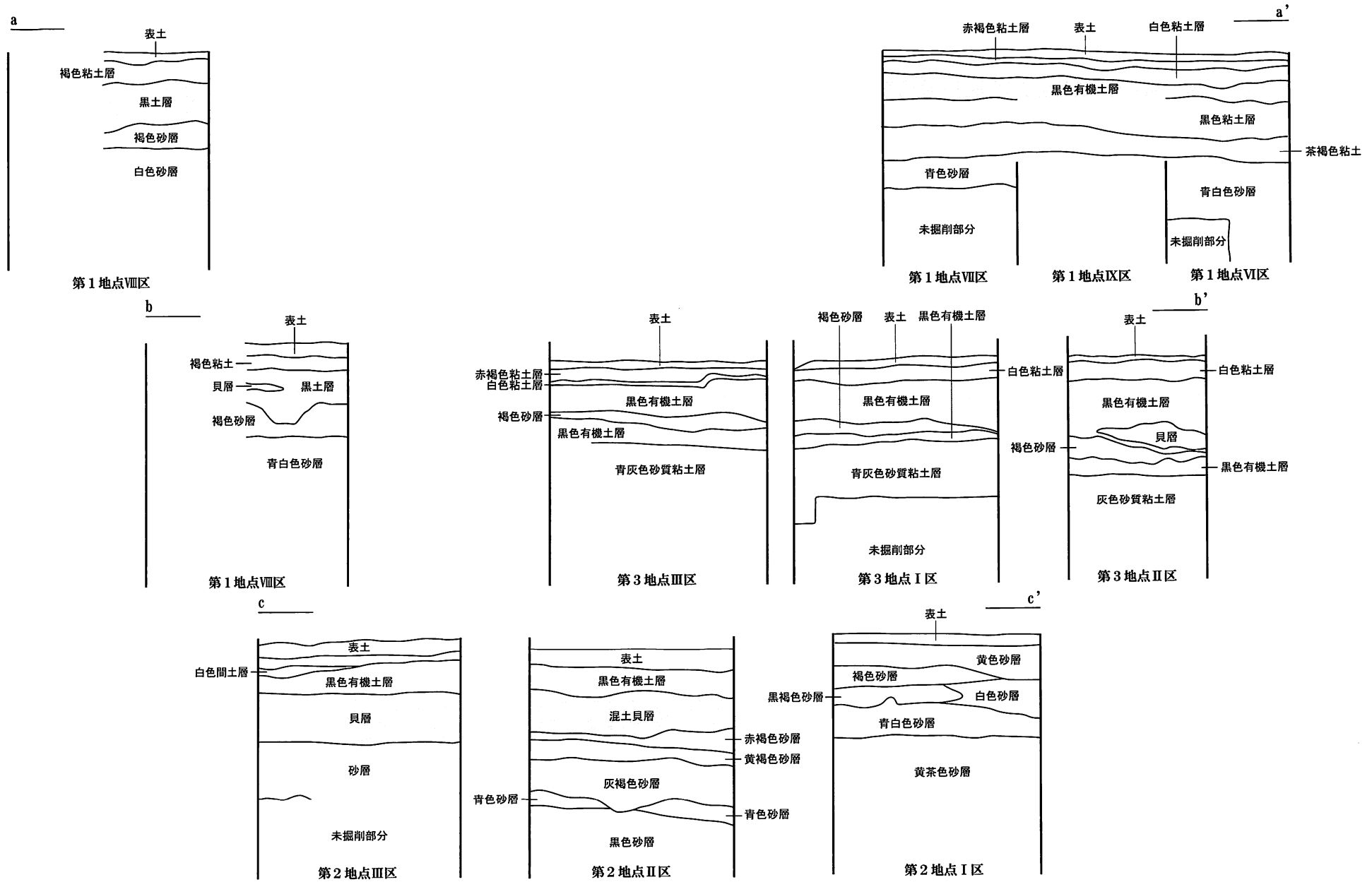
されており、第1地点IV区及びI区以西にも広がっていたようである。すなわち、コンタライン「-1」に沿って、第3地点II区以西、第1地点IV区以南を貝塚の範囲とすることができそうである。

また、第5図b-b'のとおり、第1地点VII区以东においても、貝層と注記された層序が見られ、土層注記では、「貝層中の貝」として、「カキ、イシダタミ、スガイ、ハイガイ、ウミニナ、蛤(原文のとおり)、ツメタガイ、オキシジミ」という貝種構成の記載が見られた。また、貝層下位でも「褐色粘土層中にも若干貝土あり」というメモ書きが残されていた。

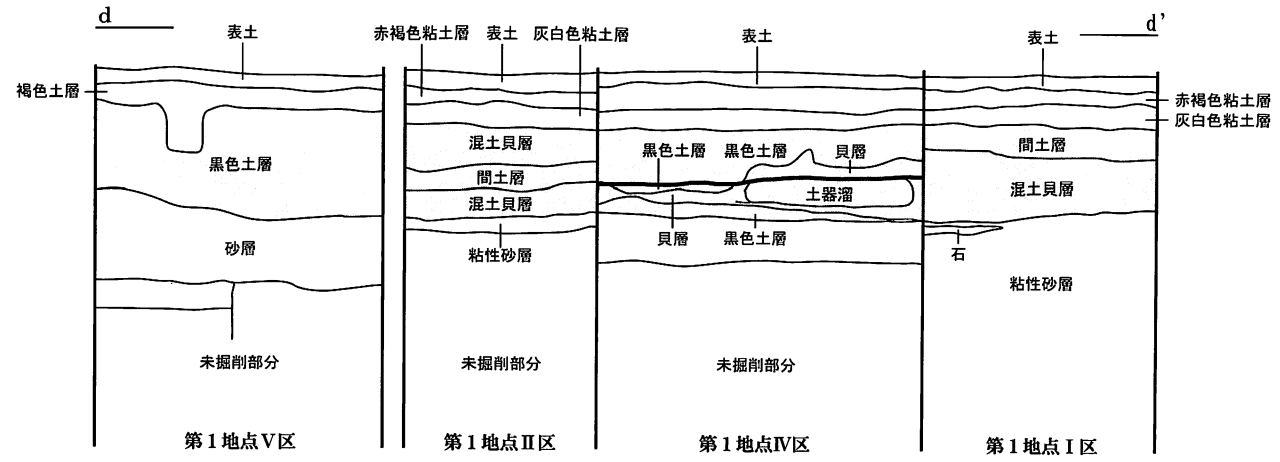
本遺跡では、第4図のとおり、①「第3地点II区以西、第1地点IV区以南」にかけての一带、②「第1地点VII区以西」の一带の2ヶ所において、大体であるが、貝塚の範囲をほぼ押さえることができそうである。

### 3-3. 人骨の出土分布

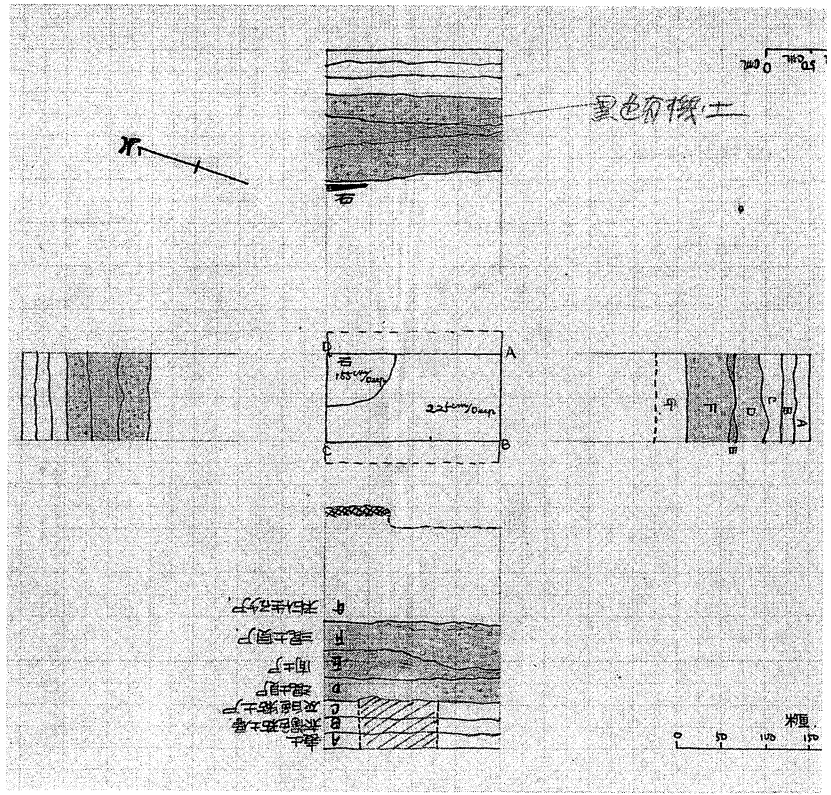
「山内資料」には、人骨が含まれておらず、また、金子浩昌の動物遺体の記述においても、人骨の記載は認められない。しかしながら、「屈葬人骨の出土もある。」(鎌木 1986) という記載のとおり、本学博物館学芸員課程の保管資料中に、「1号人骨」・「2号人骨」の遺体が遺されていた。また、第2図を見ると、第1地点IV区から2体の人骨が検出されたことが記されている。IV区北側を「1号人骨」、南側を「2号人骨」としていたようである。また、第6図d-d'の土層断面図を見ると、「1号人骨」の平面分布と掘り方の分層線が一致するようであり、「1号人骨」は、墓坑を伴っていたと推測される。なお、貝層と人骨の層位的な関係は、第6図のとおりであるが、人骨と魚類の動物遺体の層位的関係は、今のところ不明である。



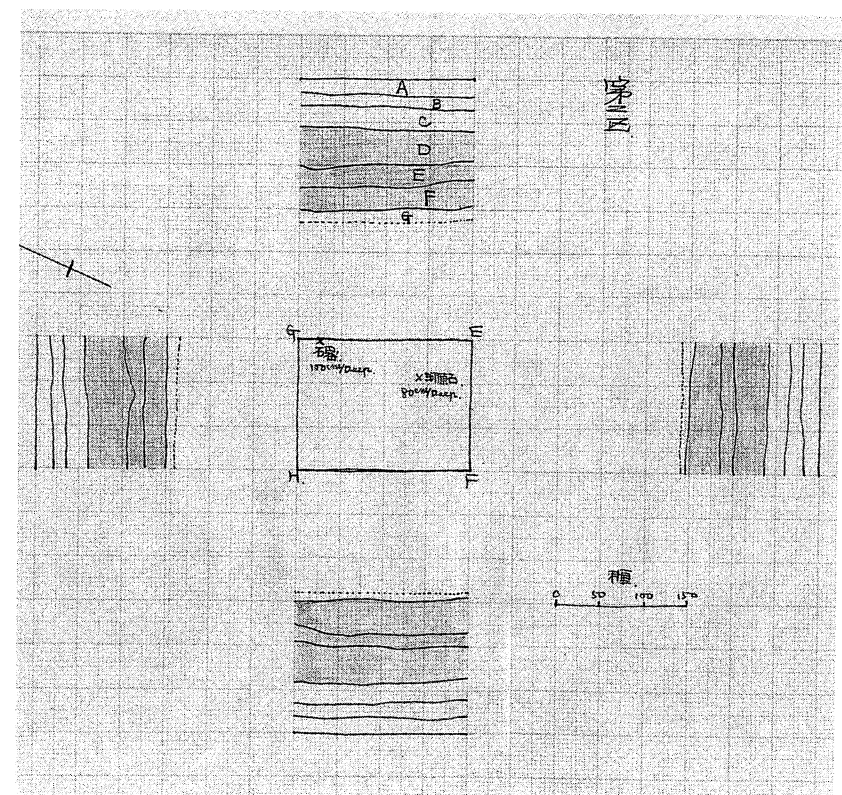
第5図 各トレンチの層序① (1/80)



第6図 各トレンチの層序② (1/80)



第7図 第1地点I区の土層断面図の清書 [縮尺不同]



第8図 第1地点II区の土層断面図の清書 [縮尺不同]

### 3-4. トレンチの土層断面図

トレンチ断面図は、第5図のとおり、a-a'、b-b'、c-c'、d-d'の土層断面図を作成した。このうち、a-a'及びb-b'については、下書きが遺されていた。また、「山内博士の調査地区」である第1地点IV区の土層断面図は、「山内博士の層位図1・2」（泉1989）と酷似する図面が遺されていた。また、第7・8図のとおり、第1地点IV区の両脇のトレンチのみが清書され、色分けされた図面が製作されていた。想像を逞しくすれば、鎌木義昌から山内清男に送付するために用意された清書であったと推測することもできる。

また、すべての土層断面図は、測り込みの位置、あるいは、分層線の位置について、海拔標高等の基準となる数値が盛り込まれていない。当然のことながら、当時、基準点の設置、レベル等の測量機器の使用は、望むべくもなかったであろう。ただし、各トレンチでは、表土上面から各分層線までの深さが測り込まれており、層位間関係を整理することができる。しかしながら、近接するトレンチを除いて、トレンチ間の層位間の対照が難しい。本稿では、トレンチ間関係の表示は、厳密さを欠くものの、便宜的ながら、地表面のコンタラインと各トレンチの表土上面の高さを揃えることで、各トレンチの層位間関係を整理することにした。

### 3-5. 土層注記と層位間関係

第5・6図のとおり、各トレンチの土層断面図にあわせて、土層注記を整理した。また、第7・8図にある「A」～「H」の分層単位の表記については、以下のとおり、鎌木義昌の記述に遵っていると考えられる。

「表土下に褐色土層（A）があり、さらにその下に粘性の灰色土層（B）、次いで黒色の上部有機質土層（C）に移行する。（中略）上部有機質土層の下は貝層となり、その上半部（D）には福田KⅢ式土器が出土し、貝層中部以下（E）には福田KⅡ式土器などの磨消縄文土器が出土し、下部（F）では中津式土器（福田KⅠ式土器）も発見されている。貝層下の青色粘性砂質土（G）には縄文中期の土器が気付かれた。地点により、貝層をとまわず、上部有機質土層とはちがった黒土層（E'）が見られ、後期・中期の土器をとまない、間層である褐色の砂層（F'）を挟んで、その下にさらに黒土層（G'）があらわれ中期の土器が発見された。」（鎌木1986）、「さらに別地点では、最下部に青色粘質砂層（H）があり、縄文時代前期の土器片をとまうので（後略）。」（鎌木1986）と土層注記が行われている。

また、土層断面図と対照する限りでは、前者（A～

G）が第1地点及び第2地点、後者（A～D、E'～G'、H）が第3地点の基本的な堆積土層の土層注記ということになる。また、ほとんどの土層断面図では、以上の記述と対応するように、分層単位で土層注記が行われていた。しかしながら、A～Hまでの略号が付されず、注記が表記されている分層単位も少なからず見られた。これらの作図段階では、分層単位の対応関係の吟味が不十分であったためであろうか。本来ならば、ここで、分層単位間の対応関係を整理する必要があるものの、まずは、当時の土層注記をそのまま採用し、今後、調査日誌をはじめとする発掘調査の記録の検討を待って、正式な層位間関係と土層注記を提示したい。

### 4. 遺された記録資料の取り扱い

本資料は、半世紀以上の年月が経過しており、当時の紙質や印画紙の品質もあり、著しく劣化した状態にある。とくに、方眼紙は、収縮し、描図された図面も退色していた。また、写真は、すべて紙焼きであり、しかも、35mm判モノクロフィルムからのいわゆる「ベタ焼き」の印画紙が主体であった。手札サイズの紙焼きも数枚程度含まれていたが、画面上から発掘調査の様子を窺い知ることが困難な写真がほとんどであった。フィルム原版的な存在は、今のところ、不明である。そのため、写真4～35については、高解像度のスキャナーで「ベタ焼き」を取り込んで、画像処理を施した。そして、35mm×23mmの画像サイズを拡大し、少なくとも、当時の雰囲気を読み取れるようにしたつもりである。しかしながら、土層断面等の写真については、退色が激しいことから、土層注記等を裏付ける資料になりそうにもない。また、ネームが欠如している写真が半数以上もあり、当時の関係者からの聞き取り等によって、被写体を特定する作業が不可欠となろう。

今後、本資料を精査しながら、発掘調査の内容を掘り下げるとともに、発掘調査に関する記録の猟渉、出土遺物の所在確認を継続したい。また、当時の関係者からの聞き取り等が可能であるならば、発掘調査の記憶についても取得しなければならないと考えている。

### 謝 辞

本稿の作成にあたって、下記の皆様よりご指導・ご教示を賜った。厚くお礼申し上げる次第である。

鎌木英子 高橋 護 間壁忠彦 間壁葎子 河合忍  
平井泰男 正木茂樹 亀田修一 白石純 富岡直人  
小沢加枝 都志見有希  
岡山県立博物館 財団法人倉敷考古館

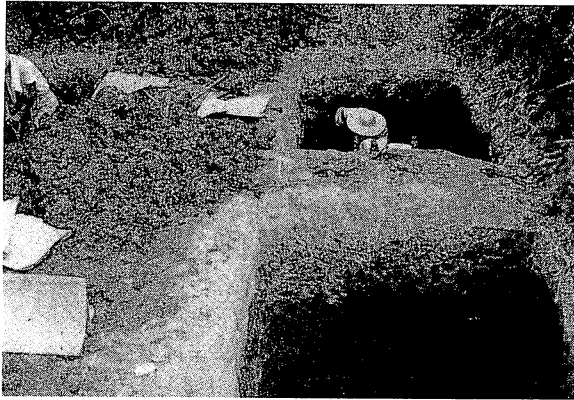


写真4 第1地点第V,VI地区 (a-a') ①



写真6 第3地点第I地区 (b-b') ①

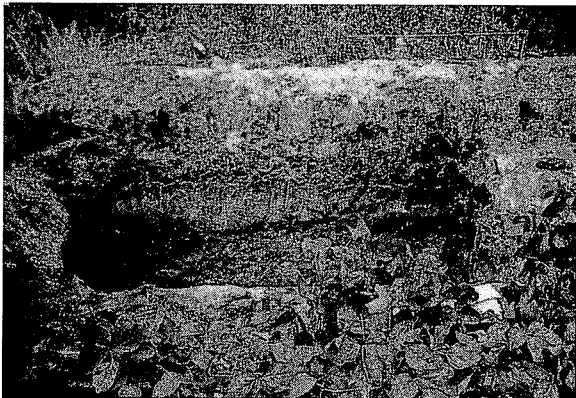


写真7 第3地点第I地区 (b-b') ②

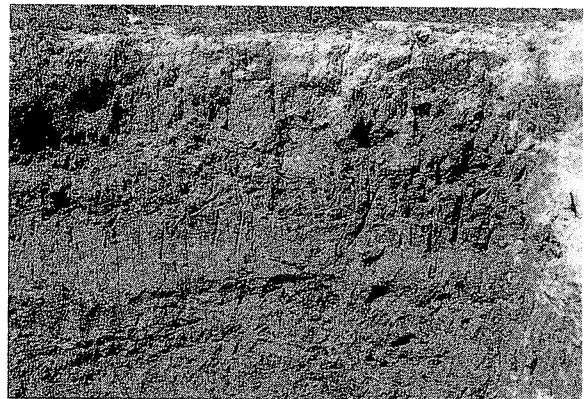


写真8 第3地点第I地区 (b-b') ③



写真10 第3地点第I地区 (b-b') ⑤



写真11 第3地点第I地区 (b-b') ⑥



写真12 第3地点第I地区 (b-b') ⑦



写真13 第3地点第I地区 (b-b') ⑧



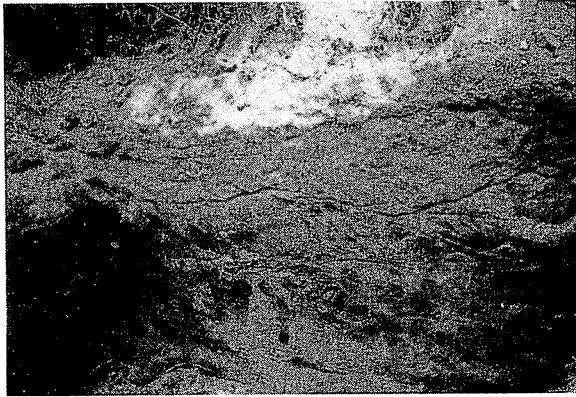


写真15 第2地点第I地区 (c-c') ②



写真16 第2地点第I地区 (c-c') ③



写真17 第2地点第I地区 (c-c') ④

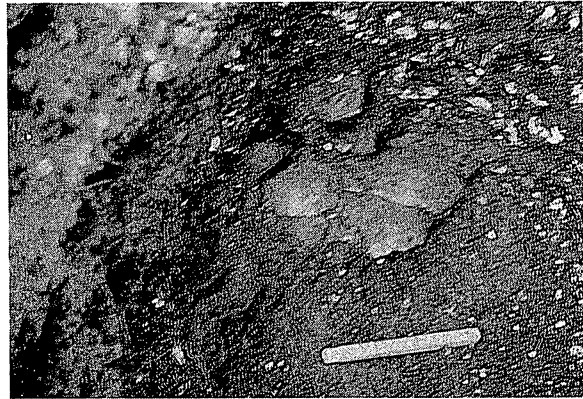


写真20 第2地点第I地区 (c-c') ⑦



写真21 第2地点第I地区 (c-c') ⑧



写真22 第2地点第I地区 (c-c') ⑨



写真23 第2地点第I地区 (c-c') ⑩



写真28 第1地点第V地区 (d-d') ②

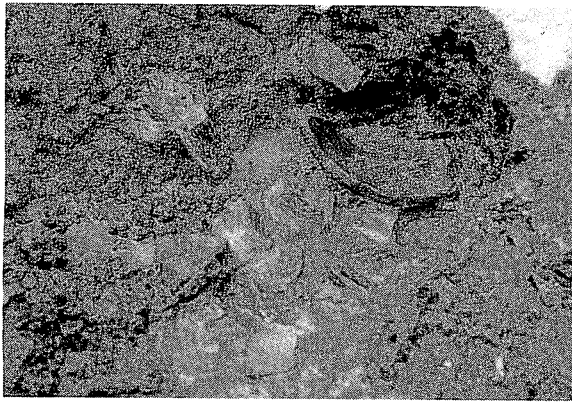


写真30 第1地点第V地区 (d-d') ④

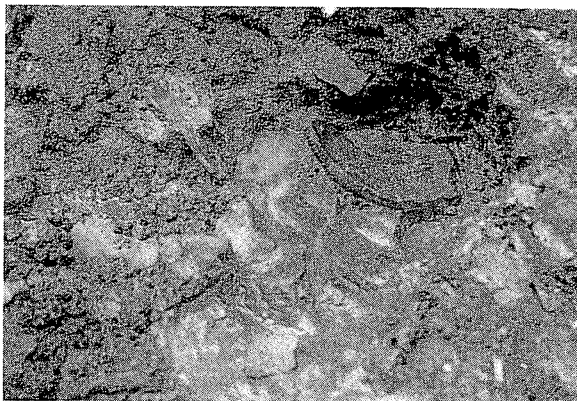


写真31 第1地点第V地区 (d-d') ⑤

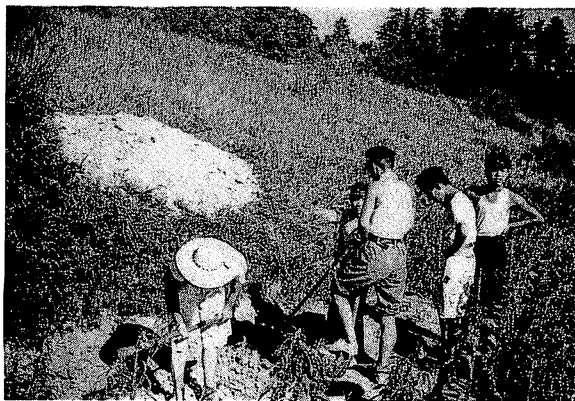


写真32 第1地点第V地区 (d-d') ⑥



写真33 第1地点第V地区 (d-d') ⑦

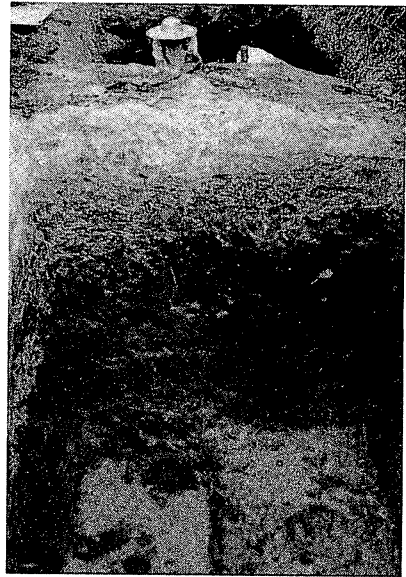


写真5 第1地点第V, VI地区 (a-a') ②

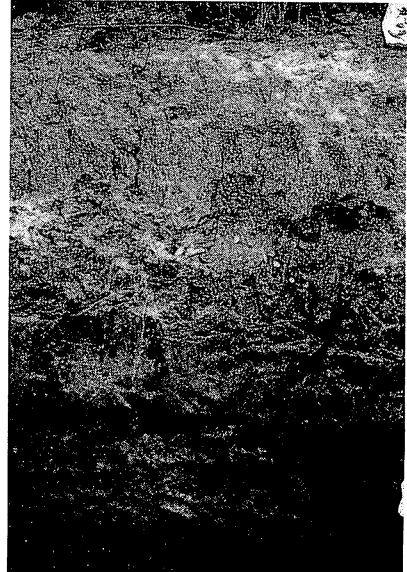


写真9 第3地点第I地区 (b-b') ④



写真14 第2地点第I地区 (c-c') ①



写真 18 第2地点第1地区 (c-c') ⑤



写真 19 第2地点第1地区 (c-c') ⑥

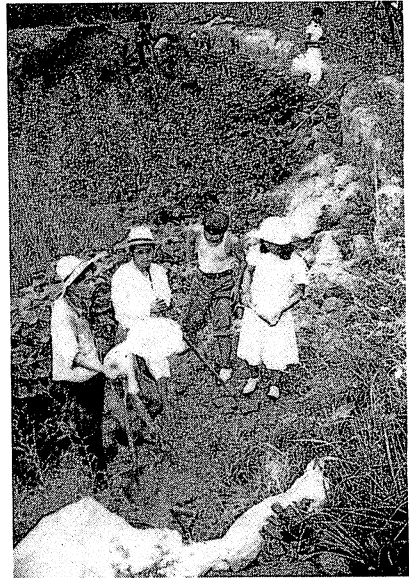


写真 24 第2地点第1地区 (c-c') ⑩



写真 25 第2地点第1地区 (c-c') ⑫



写真 26 第2地点第1地区 (c-c') ⑬

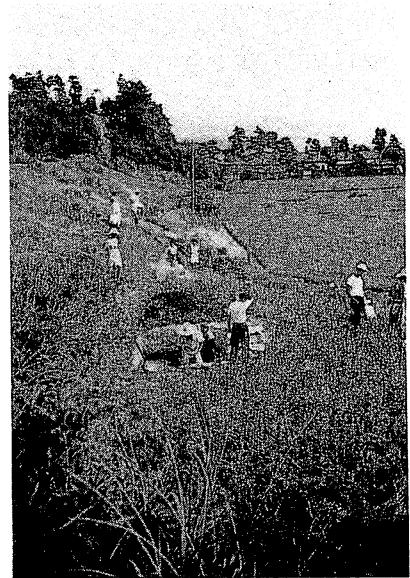


写真 28 第1地点第V地区 (d-d') ①

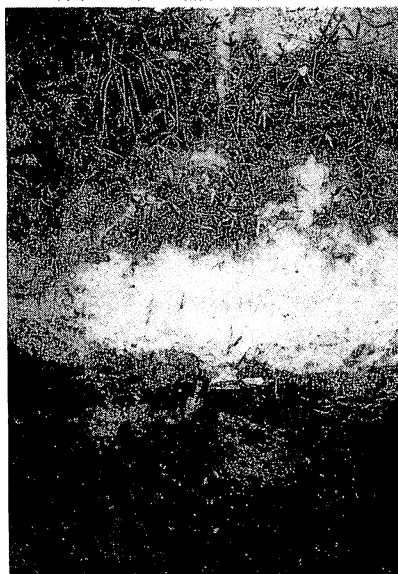


写真 29 第1地点第V地区 (d-d') ③

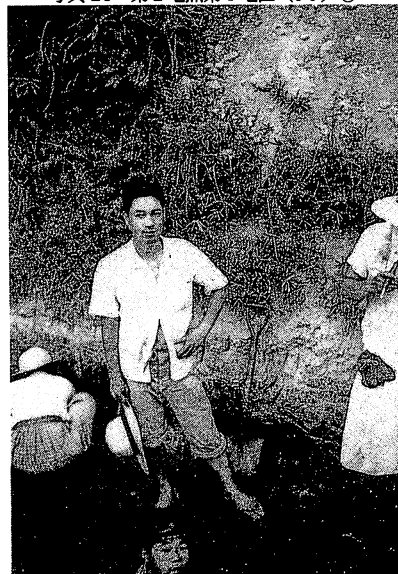


写真 34 第1地点第V地区 (d-d') ⑥

## 参考文献

- 水原岩太郎 1935 『岡山縣浅口郡黒崎村中津貝塚發見縄紋土器模様』(私家本)
- 鎌木義昌・木村幹夫 1956 「Ⅲ 各地域の縄文式土器～中国～」『日本考古学講座』第3巻(縄文文化) 河出書房 188～201頁
- 鎌木義昌・高橋 護 1965 「9 瀬戸内(縄文文化の発展と地域性)」『日本の考古学』Ⅱ(縄文時代) 河出書房 230～249頁
- 金子浩昌 1967 「岡山県縄文時代諸貝塚の魚類遺存体～瀬戸内海沿岸に見える縄文石器時代の漁撈形態～『古代』第49・50合併号 早稲田大学文学部 144～151頁
- 池葉須藤樹 1971 『岡山県児島郡灘崎町彦崎貝塚調査報告』(私家本)
- 間壁忠彦 1980 「縄文後期彦崎KⅡ(竹原)式土器をめぐって」『倉敷考古館研究集報』第15号 倉敷考古館 76～89頁
- 鎌木義昌 1986 「17 福田古城貝塚」『岡山県史』第18巻(考古資料) 岡山県 43～46頁
- 泉拓良・松井章 1989 『福田貝塚資料～山内清男考古資料2～』(奈良国立文化財研究所史料第32冊) 奈良国立文化財研究所
- 鎌木義昌 1992 「第2章 縄文時代」『岡山県史』第2巻(原始・古代Ⅰ) 岡山県 56～102頁
- 佐藤寛介 2004 「倉敷市中津貝塚出土の縄文土器」『研究報告』23・24号 岡山県立博物館 1～29頁
- 小林博昭・徳澤啓一・酒井雅代 2006 「福田貝塚(岡山県倉敷市)の縄文土器～岡山理科大学博物館学芸員課程所蔵コレクションについて(2)～」『岡山理科大学紀要』第42号B 13～20頁 岡山理科大学
- 小林博昭・徳澤啓一・酒井雅代 2007 「福田貝塚(岡山県倉敷市)の岡山県立博物館寄託資料～岡山理科大学博物館学芸員課程所蔵コレクションについて(3)～」『岡山理科大学紀要』第43号B 45～50頁 岡山理科大学

## The Excavation Records of the FUKUDA Shell Mound

— About the collection of Okayama University of Science,  
Museum Attendant Program (4) —

Hiroaki KOBAYASHI, Keiichi TOKUSAWA and Masayo SAKAI\*

*Department of Socio-Information, Faculty of Informatics,*

*Okayama University of Science*

*1-1 Ridai-cho, Okayama 700-0005, Japan*

*\* Mukibanda Site Administration office, Board of Education, Tottori prefecture*

*1115-4, Muki Daisen-cho, Saihaku-gun, Tottori 689-3324, Japan*

(Received September 11, 2008; accepted November 7, 2008)

In this article, we introduce a part of the excavation records of Fukuda shell mound. This records is donated by Eiko Kamaki. We deposit of this records that the Museum Attendant Program in our university.

Now, we examine this records. This photo and figure in this records is suggestive about the excavation of the Fukuda shell mound. We want to make clear distribution of the shell mound and layers of stratigraphy.